

日蓮大聖人御書全集

あきもとどのごへんじ

秋元殿御返事

新版
1455
ゝ
1456

あきもとどのごへんじ

秋元殿御返事

ぶんえい

ねん

がつ

にち

さい

あきもとどの

文永 8 年 ('71)

1 月 11 日

50 歳

秋元殿

おんふみくわ

うけたまわ

そうら

お

御文委しく承り候い畢わんぬ。

おんふみ

い

まつぼう

はじ

ごひやくねん

ほう

ひろ

御文に云わく「末法の始め五百年にはいかなる法を弘む

おも

そうら

しょうにん

おお

うけたまわ

そうらう

べしと思いまいらせ候いしに、聖人の仰せを承り候

ほけきよう

だいもく

かぎ

ひろ

よしちようもんもう

みでし

に、法華経の題目に限って弘むべき由聴聞申して、御弟子

いちぶん

さだ

そうらう

こと

ごせつく

ゆらい

の一分に定まり候。殊に五節供はいかなる由来、いかな

しよひよう

なに

しやうい

祭

そうらう

そうらう

る所表、何をもつて正意としてまつり候べく候や」

うんぬん

云々。

そ
にちれんくわ

夫れ、このことは日蓮委しく知ることなし。しかりとい

こころえ
そうろう
こんぼんだいし
ごそうじよう
そうろう

えども、ほぼ意得て候。根本大師の御相承ありげに候。

そう
しんこん
てんだいりようしゆう
なら
くわ
そやどの
もう

総じて真言・天台兩宗の習いなり。委しくは曾谷殿へ申し

そうろう
つ
おんとき
ごだんごう

て候。次いで御時は御談合あるべきか。

みようほうれんげきよう
ごじ

まず、五節供の次第を案ずるに、妙法蓮華經の五字の

しだい
まつ
しだい
あん
しょうがつ
みよう
いちじ
祭
てんしやうだいじん

次第の祭りなり。正月は妙の一字のまつり、天照太神を

とし
かみ
さんがつみつか
ほう
いちじ
たつ

歳の神とす。三月三日は法の一字のまつりなり。辰をもつ

かみ
ごがついつか
れん
いちじ
うま
かみ

て神とす。五月五日は蓮の一字のまつりなり。午をもつて神

しちがつなのか
け
いちじ
まつ
さる
かみ

とす。七月七日は華の一字の祭りなり。申をもつて神とす。

くがつここのか きよう いちじ

いぬ かみ

九月九日は経の一字のまつり、戌をもつて神とす。かくの

こころえ

なんみようほうれんげきよう

とな

たま

げんぜあんのん

ごとく心得て、南無妙法蓮華経と唱えさせ給え。「現世安穩

のち

ぜんしよ

しよう

うたが

にして、後に善処に生ず」疑いなかるべし。

ほけきよう

ぎようじや

いつさい

しよてん

ふたい

しゆご

きようもん

法華経の行者をば、一切の諸天、不退に守護すべき経文

ふんみよう

きよう

だいご

い

しよてん

ちゆうや

つね

ほう

分明なり。

経の第五に云わく「諸天は昼夜に、常に法の

ゆえ

えご

うんぬん

い

てん

ための故に、しかもこれを衛護す」云々。また云わく「天の

もろもろ

どうじ

きゆうし

とうじよう

くわ

どく

諸の童子は、もつて給使をなさん。刀杖も加えず、毒も

がい

あた

うんぬん

しよてん

ぼんてん

たいしやく

にちがつ

害すること能わじ」云々。「諸天」とは梵天・帝釈・日月・

しだいてんのうとう

ほう

ほけきよう

どうじ

しちよう

四大天王等なり。「法」とは法華経なり。「童子」とは七曜・

にじゅうはつしゆく まりしてんとう

りんぴようとうじやかいじんれつぎいぜん

二十八宿・摩利支天等なり。「臨兵闘者皆陣列在前」、こ

とうじようふか しじ

ずいぶん そうでん

れまた「刀杖不加」の四字なり。これらは随分の相伝なり。

よ よ あん たも

だいろく い

いつさいせけん ちせい

能く能く案じ給うべし。第六に云わく「一切世間の治生

さんぎよう

みなじつそう あいいはい

うんぬん

ごせつく とき

産業は、皆実相と相違背せず」云々。五節供の時もただ

なんみようほうれんげきよう

とな

しつじじようじゆ

たま

いさい

南無妙法蓮華経と唱えて悉地成就せしめ給え。委細はまた

もう

そうろう

また申すべく候。

つぎ

ほけきよう

まつぼう

はじ

ごひやくねん

ひろ

たも

次に「法華経は末法の始め五百年に弘まり給うべきと

ちようもんつかまつ

みでし

おお

そうろう

聴聞 仕り、御弟子となる」と仰せ候こと。

しだん

さんぜ

ちぎ

しゆ

じゆく

だつ

さんやくべつ

ひと

師檀となることは三世の契り、種・熟・脱の三益別に人

もと

を求めんや。「いたるところの諸仏の土に、常に師とともに

しよう

ほつし しんごん

すみ

ぼだい どう え

生ず」「もし法師に親近せば、速やかに菩提の道を得、こ

し ずいじゆん

かく

ごうしゃ

ほとけ み

の師に随順して学せば、恒沙の仏を見たてまつることを

え

きんげんたが

だいばほん

い しよう

得ん」の金言違うべきや。提婆品に云う「生ずるところの

ところ

つね

きよう

き

ひと

きへん

処にて、常にこの経を聞かん」の人は、あに貴辺にあら

ゆえ

つぎかみ

みらいせ

なか

ぜんなんし

ぜんによにん

ずや。その故は、次上に「未来世の中に、もし善男子・善女人

あ

み

ぜんなんし

ほけきよう

たも

ぞく

有つて」と見えたり。善男子とは法華経を持つ俗のことな

しんじん

たも

しんじん

たも

り。いよいよ信心をいたし給うべし、信心をいたし給うべ

きようきようきんげん

し。恐々謹言。

しょうがつじゅういちにち

正月十一日

あきもとのごへんじ

秋元殿御返事

あわのくに保田

安房国ほたより出だす。

い

にちれん

日蓮

かおう

花押